Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
3043

特
へ13
3043
3

美濃舊衣八丈綺談巻之三

東都曲亭馬琴編演

離為火

落黄葉

白木屋諸平ハ極めたる。殘忍の癖者なれバ。諜松が薄命ハ。ふく隣むに
あらねども。妻のうへ子のうへにハ。心よかるとのうへなれ。諜松が崇まや。と年来
悔しくもふかなり。その子の危窮を救ひなバ。こが罪障ハ贖ふべし。と見に
もう利ハ計ふまく。聽て宿所まねくかへり。陽にハ恩ハ施せども。陰にハいたく
忌く。家だりを心ハ放さず。又使るゝ小厮の中に。その名ハ岐前にあらふ。
當國羽栗郡なる。復塚の孀婦が子之とハ諸平が堺橋へ材木店を開ひ
ところより。はや二三年使ひて。年十八になるものから。諜松と立ならびてを
心操いたく苏つまく。主の為になるものなれど。諸平ハところに諜松ハ尼よ

あまたびとまつまもち。及ぼとして終て用ひぞ。筭筆なども手にゆして。心
まゝ実なる諜松にハ。火を打せ水を汲せ。その暇あるとれハ。諸太郎が間人にて。
店のゐるに與ひらせ給ハ。却要時の休暇もなく。奔走しくぞ日を送ぬ。現湯にも
入り。水にも浸さる。つゐてもてく只苦しれものハ。小衛と茶抄をといふ。世の常言も
故あるゝ。諸太郎ハ年もたや。九ッになりぬれど。疳疾に閉らまて。途三町とハ
走ることかなはぞ。抱いふことさへ。諢誕らぐ。六七才なる童にも及ざるとのこ
なれバ。動きまたバ諜松が。背に被ひて行原に出。彼を出せ。此をとまと。起居
隙なく使へども。諜松ハ隨分とそのところに悖ふことなく。そまづまふく冊けだ。
諸太郎ハ痼積と我隨に短氣つよくて。常に諜松を鞭罵り。なれ打飽かで蹉跎。
声ふり絞ひて泣毎に。諸平ハその理非を問ぞ。走り来て諜松が小髮を
三四ッ左右へ打髻て蹂躙す。この白癡ありぞまふ童とおもふて主をや[illegible]

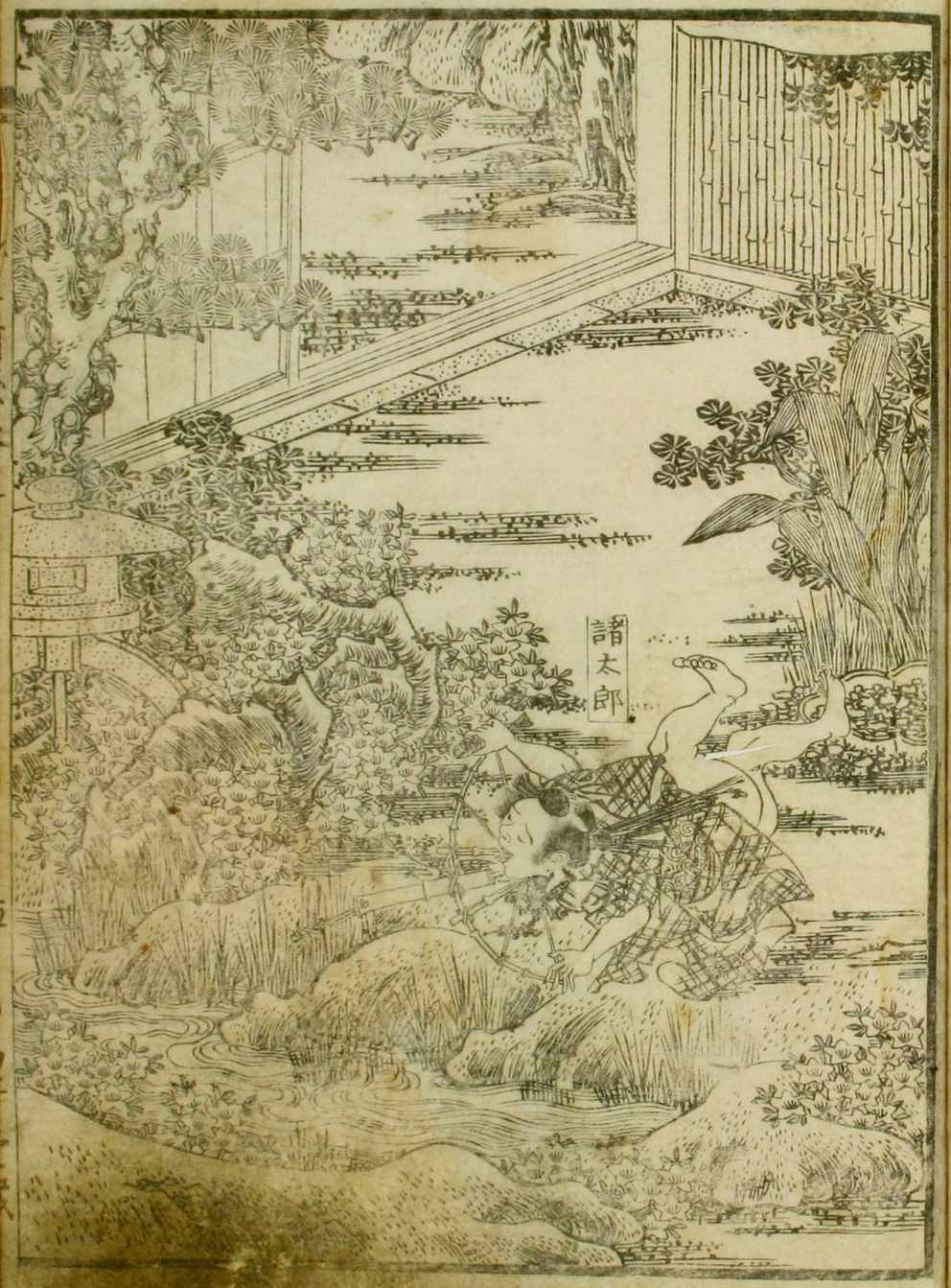
渠ハ多病のものなれバ。何にまれその意に任して。よく衛ぞれとなるに。
とにかくに悖ふて。泣して鉢を惹出せとて。可惜穀を費して。これ徒汝と
養んや。今の疼さ我忘るゝと敦圉嗜りて又蹴倒し。諸太郎我賺しとしらへ。
こが子の笑白いつゝまぐハなれ。罵ると罵り止ぞ。傷痛きことのこなれバ。
女房囮ハ外房隔て。正なれと我父の毎に。こが子をつゝく教訓。折て良人を
諫れバ。諸平ハまたもくうち腹立て。いよ諜松を罵るまぞ。諸太郎も
鉄に乗て。縡みるものが隨にせり。このゆゑにこそ諜松ハ。手ともいはぞ。
足ともいはぞ。支體に痍ハ絶ねどもさつ我出てハ又さらに投てゆく処を
なし。さらぞとも艱難を救れたる恩を酬はぐ。脱れ去らんハ人にあらぞ。
舊里にありし日ハ。姨母にいたく打擲れ。今又さくにこの呵責我受るも過世の
悪業なるらんと只身を責て主を恨まぞ。なれ正首に仕り。かくて今茲ハ

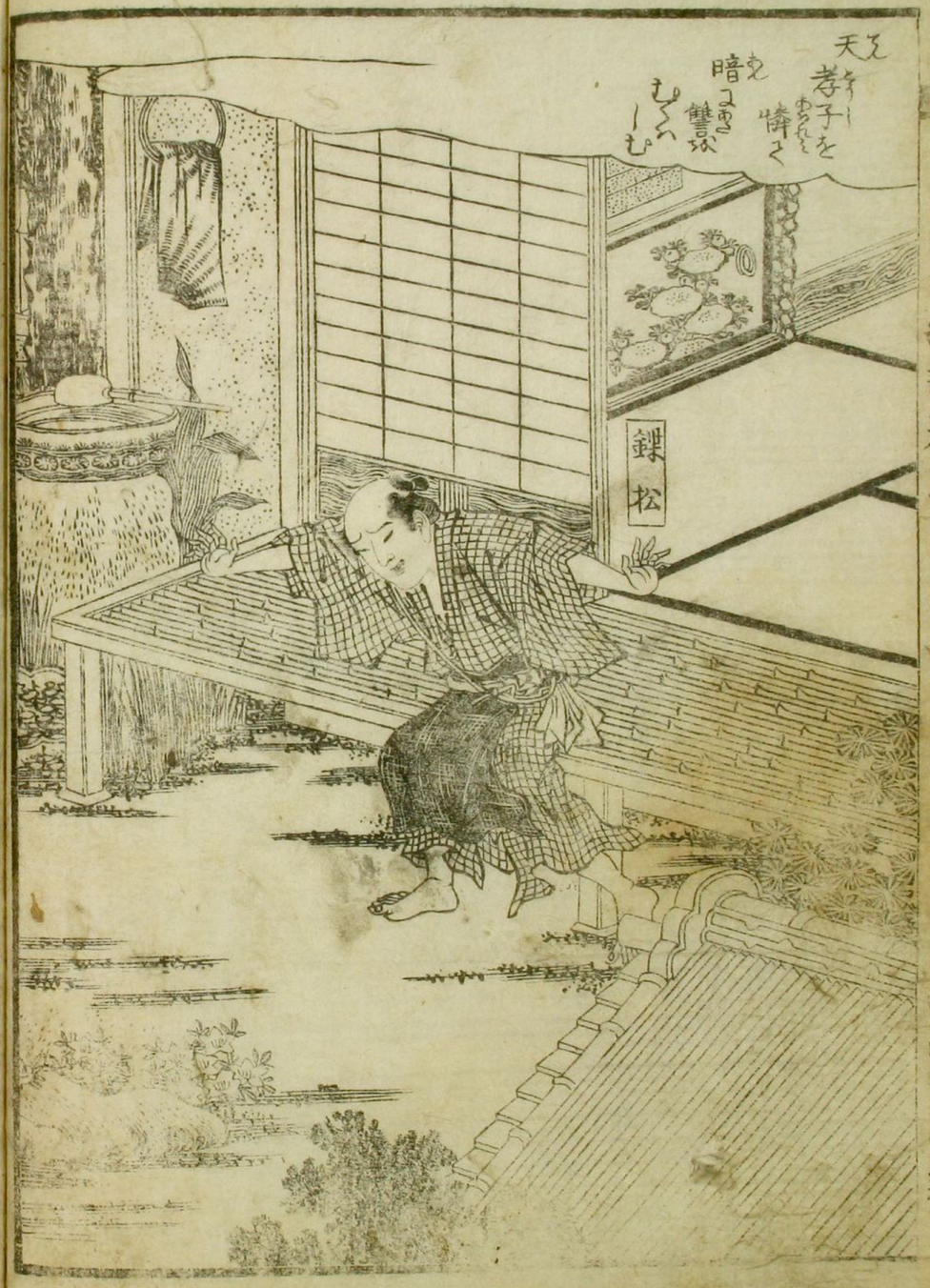
果敢う暮ぐ。明ぼび天ぢ十五年。春ぐる夏長ぐ。迎梅雨晴うれ猪太郎ぶ
鍾を乞ひ。金魚を鮨ぢ捉ぐきうり。金魚へもろこぶ邦ぢ呼ぶ。晃朝後拍
原のお人時ぢ。文亀二年壬戌の春正月。異囲ぢうこと絞渡ぐく。左海り
津ぢ来船ぢり。このぢ死ぬ魚のうをを赤白黒の三種すぐく。更紗どいうのへ
ぶ。そのちこと絞斎ぢものありこみの種数も夥出来て。銀魚あり。秋指魚
あり。こをへ今ぢ更紗魚ぢ又金魚ぢて尾の形。鄭魚ぢ似うる絞金鄭魚とぢ。
呼謂今の和金魚ぢ又金鯉魚あり。矮魚へ即ひこひこ数魚へ即
らんちぬうぶぐらんち即うへ来虫名うのうぐ。その色黄うる絞丹魚といふこと
らの稱呼へ漢名うり。又藺尾あり。凹尾あり。両端蒲萄一丈字八丈字又十
丈字。鶏冠尾の種ぢへ尾の形絞りぐく絞ぶぐ。三岐四岐箭尾房尾
楫尾扇尾斗尾と名をいろぐくぢ。ぬえーへいと後のうみぐ。金

魚の渡ぢより。僅ぶ四十餘年絞歴ぐこと。価も殊ぢ貴々ぢとぞ。猪太郎一ト
こびこと絞えぐより。獲まぐうぐとぐ吼ぶ々ぢこび。愛ぢ溺うぐより。諸平ぶ
日来の杏ぢ倣びうぐ。遥金魚二尾を購ぐ。背門なる庭へ躾松ぐて俄頃ぢ
さぐうる生洲を造ぐ。餌畜水曝豆夕ぢ生洲の蓋の雨盧まで。みる躾松ぶ
仕ぐうる件の金魚失ぐぢこび。猪太郎へ呉ぶ眉ぶ史乃つぐ。泣狂ひて。賺ぞ
吐び止ぞ。その声常ぢ倣ぐぐぢこび。諸平へ店より走り来ぐ。獏の気ぢ伝も
あぐぞ。渠松が項上偃ぐ。膝のうとりへ引ぢせつ。握ぢる拳の麻るぐだりぶ。
数回打懲ぐぐ。眼を睜ぢ。声をうり立ぐ。白徒生洲乃蓋をとりぐ。
せぢ。と豫よりいひうぶ。主命絞背ぢ。足らねぢのまぶとぐぢ。
閑ぢ考ぐぢこび社鼈の法を捨ぢぜぢこと」。おりぐぢ金魚を盗ぢ奴ぢ。
触の亜為うぢぞ。汝竊ぢへ小賣ぐ。罪絞触ぶ肩ぐをなうん明白ぢ

とも紙いへ首伏せよと敦圉て。又数回打懲し。るすれその怒に怯ぎしく。
諜松紙いて縛め。背門の鴨柄に釣揚て。刀子鍼といふもの紙臀へ突立て。
いと苛くも責しかは。諜松まもなく苦痛に堪ぬ怯ぎ。ゆるしゆるしと叫ぶ声。
拘るに老く伊えしかは。囮は慌忙て。病の床を膝行出。言葉紙竭して良久を
寛め。小厮ホも詰たに。諜松が為に勸解しかば。諸乎は僅に紙とぞめて。諜
松を佶と疾視。この偷児。そふよりしてく三日のうちに彼金魚を出さざれ。
そのたびは釈迦にあれ。孔子まれ勸解ることも。これは決してゆるさしなし。
是期せよと罵て捨て。衝と外面へ出しかば囮は施て小厮ホして。諜松が
索紙釋むろさせ。竊に勦て慰めやり。さる程に諜松は全身既に腫痛して。
その日は拘の用に得ることぞ。次の日もるすれ骨節は疼めどもと苦痛を忍びて。
薪水のるす紙勤め。もとりつくそふやう。そふ翌の内彼金魚を数乃如く

贖ぎ。これはかるすらぎ打殺されるん。されはとてく去年の某月にも
こへ来つるより。三度の服はあれども。衣るぞは。るすれそのとれの後にして。
綿入たる紙夾衣とし。夾衣を又単にして。かう破れ果れども。古衣一つも
あるらぎ。況て一緡半錢も。手に長物とてはあれもの紙何をもて價とれ。
金魚二尾を貲ふべれ。只獺にあれ。鼬にあれ。金魚を捉たる癖者紙罠に
かけて眼前。ぞが盗せぬよし紙。しらしまいらさる外術をなし。計るにるすれ
生洲の中には。小鄭魚三ッ四あるすれば。彼味を忘れ得ぎ。是来ぞは紙
来べし。さはとてもとり尋思しつ。舊里にありしとれ。猪夫が猟を捕る。弾
とういふ拘紙。打てゐてることあれば。それに做ふて志のびくに。一張の弾
罠を造りつ。これ紙生洲のほとりにかけて。一尾の鄭魚を置餌とし。
物ありて中るとれは。弦外れ弓延て。前に弾うるべく機関とれ。九日中


諸太郎


天孝子を憐て
暗に讐なむしくへしむ
鍱松

とりくるまゝふうちをもとゞめ。立ぺくけてるまゝふうちをもとゞめ。立
ちぐ立續ける。疾のそるを弦つてるよ。背門の槐よ日影傾死蒼を憐餌求食る
比ゝ生例のそるふ却あるく。忽地苦と叫びゝぐ。躍松影の死あやゝと走り
出つてこと紙てるよ。主意やる捐太郎ハ置餌の鄭魚ん倆ゝ彈罷よ
彈ちく。吃ゝより項まぐ。笠前よつてぬるとて血よ塗ゝと足弦そるさるはて
仆ゝとう。探松ゝこの形勢よ胸薙ゝ。足癱ゝく。魂も刃よ倉ゝ輾ぶぐく
走あゝく。笠前弦拉ゝ。抱ゝ起ゝこの。さるくゝよ勤ゝぐゝ綽絶ゝまぐせんとべ
ゝ。淺ますや憑よ。金魚の仇を復ゝるぐ。呵責脱るてものやとおりよ
むりるころ性の。好ますねべすまゝてつぶ告ぐぐゝ。鵜よ罠をうけゝのぐ。劫ゝ獲もせぐ罪重さ。この妖孽を離ゝ室。
和子ゝさや主の救も。左右の指よ溝ゝぐゝ。その性弛くとゝまぐべ。弦も罠も
ちりあるぐ。置餌の鄭魚をとらんとてく。彈の弦よ引弦さゝ入ゝと莫ゝ命を
隕ゝのて。ぐづくゝゝと弦殺をるよおよねぐちら押さり弦ゝて主の一子弦
喪ひくゝ絶くゝひ釋言ゝ禁ゝるゝ。令運の竭る所ゝうとと毎よ齟齬へべ
後悔ゝるよ立すゝ已ゝ兵連よ死んまゝとゝひ決ゝく遠ゝく。庭の松よ雫紙
投ゝ打。猛ゝんとそゝべ生憎よ太中なる索ゝぐゝ。つふゝくゝいと脱く。
三ゝびかるよ三度影雑ゝく。とくゝとゝどを竟よる死ゝぐ。兵吠を
ゝ死切人とゝ抱ゝるゝを又ゝ寸鉄をりゝ狂べそのゝみくすべる
ゝいでや小川へ投んとてく。庭門より出んとゝゝ又忽地よそよ生ゝすや
百歩の内ゝうゝとゝ。ゝ弦去ゝるゝ逃ゝる仆ゝう。この後はゝこゝとゝ
孰ゝ縁由をまゝべ死せめく一筆遣さんとゝひゝくゝく竹縁のゝとりへ
猶ゝとゝう。右の小枝弦囀断つ。血弦のく障子へさゝくゝと彈の弦弦書陰ゝ。

又緒太郎が死骸よ對ひく。泣ぐ涙の覆水を悔てかくらぬ刃の科戒勸解る
唱名一トさぢ小冥土の倶戒整すつ。折戸乃國嶋さそく。関の小川へ死よ
や。數死いとぞ惜くとを憤死心ん神ぞ。ある因果覿面諜松が父諜松ん
緒平が非業のも洗ようち殺さと今又緒平ん諜松がかける罵子を
殺さる。彼ん一隻の鬼よ託ろ。こをん二尾の金魚よ終る。輪廻ん免ぐそる
車のごく。奇報ん只多の拘よ竟るよ異ろうぢ。天網疎ゐーく漏さ狢ど。
仇と志ろ裕べそろうぢを復を怨戒刃の仇ゐーく。底の水屑と只管よ。
死戒決ーぞ良とな。ゐーも黄昏のつなりひをぢ緒平主ん子ゐ珍とて。
この條乃よ戒志ろぞ。背門の折戸を鎖とれよそでゐくこゐ緒太郎が。
死ろ戒又てーべ。いつぐ驚死駭ざいん四も人よ扶らるに仟縁のとろゐ
出ぐ。よと泣く伏沈ん緒平ん子の亡骸を。抱起ーく旦く涙よ抜戒

ゐをいうぞ。とろくーく諜松が血をのく障子ゐ書送ぜー。我刃の文字と
ろるよ罵よかろうく余戒隕ぜー。緒太郎が異へなる光景や疑ひん解るゾろ。
うちをやくべ死とな志裕べ。まづ小厮ゐ戒部ーく。諜松戒逐そるよ。彼ん主や
身を振ん堺橋の桐千よ。脱ろけくる草履ありそく。僅よこ主戒ぞそへ主そ。
徳の数戒告ーぞ。緒平ん遂よ御ろくて。四のろ主ろぞ子の骸を打ちろつて
泣ゐしゃ次の日尾山の茶毘所へ送ーすく。遺骨ん菩提所ろる。白木ん報輪寺へ
葬ろろ。かく主後よ女房四ん只緒太郎ぞと戒のこゐひ主てこ泣ぐゐ。
涙の乾く隙をるー。さろやぐろ九年が間うち郎くのをありつるかん我
憂患よ病朽折主そ。白粥ごろを咽喉ろろぞ。日よ添う主ろ涙の
弱を果べうえーべ。緒平ままもく宵若ーさる。今昔戒ありひ也主ぞ。
ひようくを諜松を。引入主ぞん一子を。いろぞん雲べ戒。よやろ主。這妻が親ろる

諜多弦る辺境抗ようけうそを先非を悔くその子を救ひ善報こそあるべよ。
家狗よる狐咲ミこの狭危よあ〳〵をそくべ涙脆くく人の為ん慈悲善根ぬ
益の所ありと悔ゝ狐ミ弦もてそう。と却の
人よ尚べ死ようう祈ぎを女房囲ぶ斯有とそ。ちくぐ歎くと慰やうくはさのふ
ふさま顔の焦悴ぎざ一咏さう歎息し。大約人の親愛ぺ夫婦ほまさこのめ
うけミぎをいと悲ゝ死とかなとべ。おんみあゆを告ざり。と且一個り女児
あり。渠生ミてく僅よ百日。前妻嗚声ん為まりしこべいよく養云月の後妻弦、
失ひ。ちくを端午の誕生ぎのミべ相譚とと養ふ人ほこと弦りぎ疫ふ物こと
嬰児をう死抱彼此と徘徊せーよ宿縁ありてやちぐぎをふ川の橋ぶうち
そう。尾花氏の門よ棄ゝ弦彼人猶そく養ひとう。お駒と名つけよく寵愛を
よくくるミ曩よ薪弦責序よ。ちくぐ彼ゝよく彼ゝよ文通ぎとうべ

容止も。倩稀なる少女よなりつつ。かくて又この死一移徙ぜーより彼人乃。花所よ
對ふぶ背門ふ門一條弦隔るあ。彼死よりを曼首よりを居ぶうみをうれだ。
吾倩お悲ぶ哀ぶるこぶ子ミくく子まあよぬ駒を
こんとく半晌も活業よ懈んへ。益の正るとそひ後で外ぶうこをを犯
ゆぐぎ。両三年弦るとう。艶麗ミぞうりんぎとう。傚るよ女児を今ふその年二七ミうりねぎべ一比
よりを又さうよ。艶麗ミぞうりんぎとう。傚るよ女児を今ふその年二七ミうりねぎべ一比
生ミ一月の。令月吉辰うりぐぎ。僅よ十年弦一期すくぐ親ミの長死歎弦を
送一又、駒が誕生ふ津日うりミぐとを恙うく。棄ミる親よ惜る。吉凶ミうりよ
泥ミくく。一概ミふ決めぐ已五倩不思議よ菱跡ん。と豫くおりぐ金成玉うりを
女児をふ棄ぐ死。彼り一家よをんこ云。腹ふ貸祖どかる時ぬん才ぐ憂苦発討る。
よミぐぐとうりほりの弦。と唧ぐすミ抱ぐうよ四ふをぐく嗟嘆ーをぬうや

もの死まくら枕擡前妻よ女児あり。しが学む役うる死隨よ。親右ら。ぞをめ
拘よ。遣せーと告ろ生ーとう左ゑ。往方いふと折々ひ中る
日の約しろ。実ハ棄てし川一條隔る里よおとえと神るらぬ対ゑぞる死。
平く腹よ宿さびとと女子ハ母のるふ。このりためなるよ。いと惜ー死ゑ
ろひぬ。そハ今更よ百遍悔千遍悔とそろう祓ど。棄る門とをおるぞ死よ。
ゑ方が古主の仇人うる。才作ぬーよ拾せーへ。ろらぬとろひうぞ。後のうちふ
ゐるし。とふよ緒乎ハ氣色ろくく。組ろ。膝我立うゑー。ことぞるろらぬ
一角どの。仇人をろえ方ハ訊よ。ゆてろ。尾花氏とハいへ中らん。と研ぶび嘆息ー。
人作うそぞそのる我そぬよろよく右ろく祓ぶぞ。ろらぶ嫁うて来うる比
秋の夜うぞ死寝ぜろうよ。お方が古主ハ芦月ぬ。母刀自ハ又彼人の乳母ぞ
告ゐふを。ゆのくよ斉ー死夫婦の情縁。ろらふを又二八の比まぐ稽ぁー。

言く。才作ぬの阿翁うる。牧村氏の奥ざゐの。炊妾よ奉ひろぶ一角ぬの養し
ろ。主の夫婦がそのる我密中ハ相譚ゐふを。ろうろく窺ゆり死。縁故を
筒様ぞと一角が才作よ称をとてろる徘の話。いとを苦ー死息の下よ首ろり我
流ろし且ーくく息我吻死。そ是より三年の春の比。ぶ対ー暇ゆりて。
舊里白木へ立くり。媒妁あり。縁ありく。帰ざく後よちぬてろる良人の
古主ハ芦月ぬ。某の年月某の夜よ敵ゆハろ是ぞ撃ま是ゐふ。良人の家
断後ろ。といとをあるびよ告ゆ。敵主の仇人とろし良人ハ怒我
惹起さび。是より一ろる敵ハ乃
門ろ入びゆるもいろぬよまそ。そひよ是ゐふ。
さてあり。ろよ棄ろ是ー。女児が往方いと惜ろ。是をおろぐ口つ
くり。益ろ死よ我告ゆり。といひあくぞ呟いろく。そぶまふ郎け是ゐ緒乎ろ

呆れて醉るが如く。醒るが如く手紙抗て。百會のあたり紙直と拍。原来古主の讐敵ハ。尾花才作なりける歟。かりせばたゞめより。なぐてやこれに告ざりし。のちろ一角ぬしハ。こが母の乳をのく孚まわらせたれども。これ少ハ異なり恵もなく。奴隷にして使はたるに。二ツなれ命紙的に。主の仇人を殺んハ嗚呼こ。たゞあれど怨ある人とも志らで。女児お駒を其ゞ門へ棄たる紙いかにせん。這奴ハ守の老臣たる。牧村ぬしの壻なりとも。今見る正ハ浮浪人行程の貯禄あるべれ。無恋やお駒ハ殊に富む。実の親も川一條紙隔てこゝに処とも。ゆたらず。同にも比。花にも喩ん可惜少女ハ浪人の。女児といはれて一生涯足るよしもなく過ぎたらめこれみな父が悦なり。とだりにして今更に。とり復せばれ方便ハなしかりせば尾山まで才作が突へ墮たるとれそがまに。見殺にせばかりし紙朽惜れるのもなく。なり。と勢猛く声立て罵んとして

強方をこんなり。めし小厮ホに伴はれやさるとあれば紙餌みつ。あけて沿いハぬ猶の白ゝに。これ下り不和と不破の関。なかく恨紙含なり。

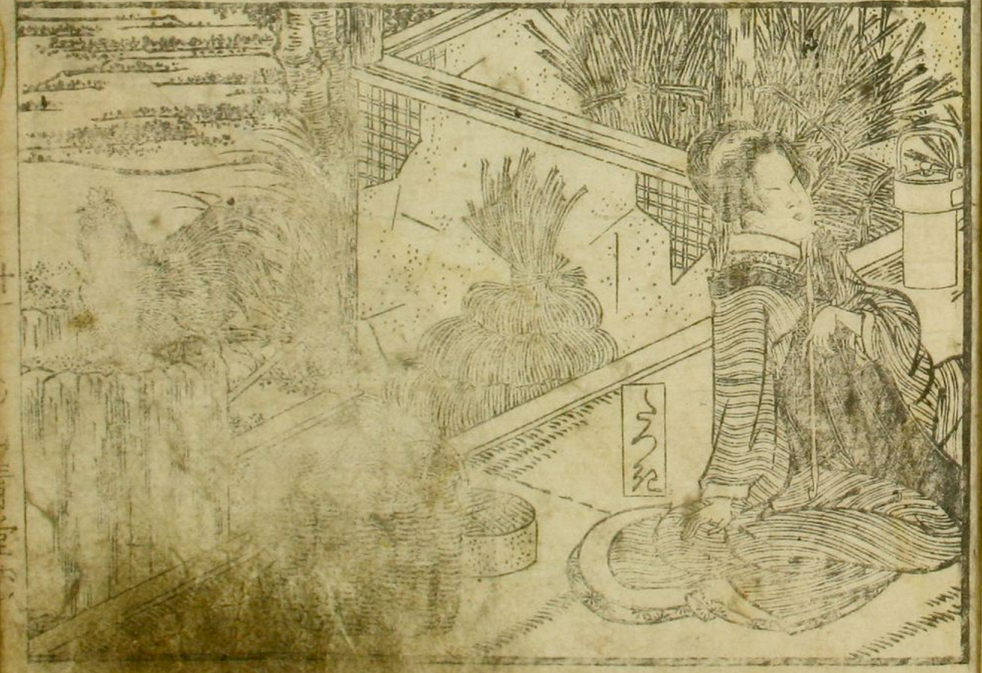
震為雷

落黄葉の下

さる程に囮が病苦身に逼りて。鍼灸茶餌の效もなく。諸太郎が初七日に遂にむなしくなりにかり。寔に死喪愛惜の悼えのこ賢も不肖なるも哀慕乃塵に同をあはず。憂紙掃ふ箒なるれば。只一身を利と欲に造りなしたる諸平なれども。これに再て妻と子を一旬がうちに喪ひて。殊更によれり果行業ごとを手につゞて。仏事追薦の営に過七の墓系に日紙送るに。要[illegible]こそかくてもあれ。現世のハ日に疎くて。ぜうぜくにおひかへせいこれ[illegible]無益の亜行なり。よしや財の限りのて。僧に施し。俗に施し。只念仏三昧[illegible]千万年紙送るとを。これが為に費を残ハ死たるものとのろ兵にかへる[illegible]

終てゐ土の下なる妻と子にかゝらぬ
銭を費んより。方便をめづらし便宜を
ゆゑ面りに知る女児よそ返さとならば
還りをせん楽が十二分の標致してよろしき
女婿を擇るゝ齎るすごとなく獲易し
さぐよくお助をとり復を計策をかゝる
と公我若しゆ智嚢を撈とぞもいひする
よしはなりけり不題下総なる手村に
諜松が一通の遺書をのこして英俊路我
投て此養母斧に追ひもとめど密支
丈八を招よして彼遺書我見せしが丈八は

すぐめ尾り我うちうしてんて冷笑ひ十三
四年信なれ親の安不我同んな這奴
ならぐと稲葉山へ赴んとてもひとろせ
今の世は地方として戦場なるゝぬ里も
なく関の鎖の固けしが忽地途に抑留
せらしてく餓死せんは必定にいうち捨て
おれ女人といふに斧は公かちおそいよく憚る
氣をうるく是より丈八を宿所に留めて
淫楽をのゝ事とせり。抑斧が此年来
貯禄為れ家我ちりて。安らけに日我
送るは何我生活にまるゆらんとすぐめは



訝る人を多かり。さしばこの斧は。そのあらじめ姉もろ共に。其漁師に人となりて。
時頼藝のおくざるに拾事せしものなれば。二乃巻に述べり今村落に漂泊し。農
夫の妻になりて。才は編蓬にありといへども。拘のいひざるいとみやこびて。結髪
化粧も鄙ならず。その容止は姉に劣りて。十分の美人なら程ど美然もなく
人を迎へ押るに易れ淫姑なれば。夫ひとり然いつでもなら人。況て諜ゆが
をらざるりては。媚然衒て里乃壮佼を魅し。その人乃誠をとり竭せば。又
いくばくを夫をうえて。一郷の譏を屑とせず。汚穢なる所行をして。年来を
経る程に。くらぬ良人を恋しとも思はず。坐して食ひ暖に衣て。世なかくに
やすしとおもひ。かれば。そのさる所。年の老たる少れをえらまず。又男の美さ
醜に管ず。呂誠ある然得意とせるなれば。馴るといへども。飽て速く。會と
いへども離れ易し。そが中に。彼丈八は。英徳の加々鴻のものなりし年十四五の

比京へ上りて。高家の小厮になりつ。其処に五六年成るとせしかば。筭筆なんど
拙からず。さべて高賣の経営にはは。才闌たるものなれど。奸智を又人に
捷し。その心ざるをしばとくて。果は主の物を掠めて。墓なく京を逐電し。
舊里なる兄に逐れて。武蔵下総の間に。夥の年月をゐるせども定たる
宿所をなく。筭筆成りて人に催し。或とれは今様の曲子を唄ひて。酒
燕の席に囲ばるを。生活とするものゝかくて丈八は。手口の鄰村へながれ
ありて。彼此の壮佼をそのじ口に手つゝしなる利成るとせしかば。里人ホを
やりせに。ころれものゝとはしりつゝを田舎にはは。手跡なれば。よくしるものゝ
稀なれば。流石にその才を惜みて。心つよくは得を逐ぎ。とくしる程に丈
八は。手口の斧にかたらひよりて。しのびくあふ程に。誠あるものにあらず程だ。
斧はものが起るまゝく。結句丈八は。残を貸衣を貸て。なみな実情を

竭せしかば。淫婦が罠にかけられてる白物ホを大かた曉すれば舌紙巻れ。誰中
埴紙をえ得ども。漸々によりてを来ぎ。斧は情郎なる丈八にのこあふ紙いとを
娼しくもふ拘から。杜佼ホがみる中絶てゝ。殘を傳を術竭て。心苦しくなりふ打。
諜松は出てかつらぎ。これ継母の所為とて。村長いてて斧紙憎めば。里人ホを
憐び猛に諜女が借財を。債るものさへいで来るにはば斧はこれに辟易して。
辛くその年紙暮しつ。明れば天文十五年。干戈且くおさまりて東山北陸の道
えらけ。近江美濃よりかへるものなかり。斧はこの光景にこゝろいよく安から
得ば。有一日丈八にいふやう。去年の某月諜松が。稲葉山へとて出ましより。今に
音耗はなけれども。これが良人恙なくて。なほ彼処にあらんには。此度途乃
便宜をはく。諜松と諸共にかへり来ることをあるべし。諜松はこゝろにが為に実は
妳の子なれども。継子こゝろの僻るまゝ。こゝろにがうへにあることを。なすさるを

までも又に告なん。然るとれはいひ釋に。いひとれがこれをなかり。これいはして
脱るべれと眉うち顰て私語が。丈八さらぐ乳をなく。このなを極めて難義に
似たれど。先にはるとれは却中に。さのこゝろもひくしもひそといふに斧は小
膝をまとめ。先にはるとはいかなるなるぞ審にまたしもひ得と問は丈八頬髯
かれ拊。おん方が良人諜女は。債を賍ふ為にとも。十四五年女房を置去にして
信せず。蛋が塩焼かれ世に家をもち子を孚ミ。やとく世にてる婦は。
かれがけやとなるてより。稲葉山へ赴れて。これにかの恨を述んには。諜松が
讒はるとも。彼人おん方を咎るによしなし。されば先にはこれがやとれにあらず
ぞや。又彼人にるのありて。今又かへり来ぎといふとも。きのふかふの形勢では
拘貸人をなれ。在に落城せんとちかれにあり。おん方が故郷は美濃といふ。
これが舊里を又美濃なり。これはいと少うなしとれ兄に債を負せしかば。

勘當せられて十六七年。生りたちを死り先送に音耗さるよしなれど。
なくなくもあらぬ同胞に今ことは故郷へかへるとも。ゆりさなべれ比しさりをて
兄は富むものなら祢ど。加々鴻山の麓にすく。猶夫株義といへば。おらざるもの
なし。よしや兄が怒る解ぞ。なれその宿所へ容られぞとも牛馬の友を
彼処にあれば。とゆをかくにもなるべれなれ。さらば吾倚もろ共にまづ稲
葉山へ赴れて。諜女がありなし。彼処にあらば。年来の
艱苦我告。もふまゝに恨を述べ。いてく良人を責めへ。又諜女は彼処にとらで。
往方をもとぞと思ひえなれば。世に憚の関をはし。直に加々鴻へ伴ひて。夫婦に
なりて一期をゐさん。寔に一事両全の。謀はこのうへはしとてもひ立ぬ人と
いふに斧は大れに飲び。おん身が才の高れ我をへば。その筑波を投てゆく。
稲葉の山を数なりぞ。こちらはが故郷をも大儒なれど。二親は世我ナなり

しゆ。主なりける頼藝朝臣は既に滅亡をもへば彼地に憑む蔭はなけれど。その
舊里をおなじ州なる。おん身と共にはけばむつよしさはとく眉に火のつくぞ。
猛に紛装をとてのへ斧はまづ。村長の宿所へ赴れて。旅たちのよし我告。良人
諜女が稲葉山へいゆれしより。年黙経たれども。雁の翅に書をかよはず。
むろしく侍りしに。今茲は関の頭もひらけて。彼地より来る人もあれば。そふ
までは俟侍れど。なれ今ら祢ばむりしは。途の伴侶を侍るなれば。なれは稲葉
山へ赴れて。良人はさらに諜松が。往方を索んとおひ侍り。就ては些の田園を。債
の代に領りもひて。後このなれともかくも。討せもへ。これらのよし我申さん
為。来り侍り。といひをあへぞ。そこら涙を拭ひつ。別我告。里人ホにを云云と告て。
をとからぞ帰り来る。おのち我をる抱うら。家奥はさらに家さへに。竊に信ぞ
洛賛に元門田の早苗とる此に。丈八もろ共に記行して。日に歩を疾に宿り。

日ゝろへて。美儀の稲葉山へ赴れつ。こゝにまたゞめて諜めが。狂死のよし行使。
剰その子諜松が往方を定かるゝらざれば。斧はさらに丈八はこれ物怪の幸
にして。猶て斧成誘引つ。加々誘なる兄を訪に。家を昔にかわら孫。主人は
こゝが兄株荒なるらむ。これいかにと訝ひて。縁由を尋れば。その人答て。舊れ主人
株荒は月まりてより。もや十四五年にあらぬべし。彼人のうへにつれてゐたさぐの
物がたりあり。天文元年某の月。今の囮主の内なる。芦月刀祢の奴隷諜めとう
候ひもの。合渡林のおとりにて。狂死せしことありかり。もちるに犯人定かなら
れば。株荒と復市といふもの連累せられて。矢庭に獄舎に繋れつ。復市は
そがまゝ月まり。株荒は辛しく。赦にあふてうへりに出れど。月さへ成労して。
いてよかり果たれば。一ゝたび病て臥たるより。漸々に焦悴。その次の年。春れ比
黄泉の客になりぬとなん。年なれ三十あまり乃人の。妻子ぐるをなりしかば。

そがまゝ空房になりたる比。吾倚由縁はなけれども。媒妁ありて家を購とり。
本荘村より移住せし。是ももや十年になりぬ。原来和殿は株荒に由縁ある人に
しそ。初とは志らでもるぐと。詣来ぬれば。わかるゝらぬ。甚を此もしるだしか。
あがり框に尻とかけ。茶を喫て憩ひ。といと正首にいつゝ毎に丈八斧は
呆れ果て。面成あれし。舌成吐れ。いふよしをなく其処を去て。此彼相識る
もの成訪に孰か丈八を。悪棍と志らざるべれ。渠が京にありしと。主を倒し。
兄を苦め。逐電して年穀所在も定かるゝらざりしに。今更猛に女人を持て。
舊里へ帰るゝ。その衣量志りがたし。おそるべしく。と爪弾して。ぬさびはよせを
著ぜ。丈八は案にたがひて。うち腹たつのこ術もなく。又斧を携て投て
ゆくへは定め孫。加々誘より七里西なる。大関村をゐると。斧は忽地。暑邪に
中りて。いと難義にえゝしかれば。則こゝに宿投て。両三日逗留せ。さいは六月の

たゞめのことゝさる程に白木屋諸平は妻とその子を喪ひて。白木の法輪寺へ
詣るとて。過七の逮夜毎に大関村をゆりしかは宿のあるゞ指して。彼人とゆく。
関の堺橋なる造次饒高が。ふもとに墓系アまたるをやあらん。命運なるてアるを
うちに大賈にありしことゝ盈ぬれば必虧ることあり。七日が程に妻小後は子を
喪ひていくばくの財ありとも拒まり讓らんさりとてよゆる乱をもなく。
ねとりかなるは鳴乎ゆゑなきぞや。とあざこゝ笑へば丈八は斧とりて走り出て。
要時諸平は目送りつゝ彼が發跡しる故は同に。富は羊次に勝を捐むは。
僻るものゝつ程なれば宿の主人は諸平がうへを。人のいふ隨ひが他へ隨いと
つぶらかに說あらじ果は笑ひに散動なり。されば丈八をも諸平が
うへを使はしより。渠を謀らだや。とおもふ心つ程にそれは。ひとりまつらを碎く
程に次の日一の計を生し。縡十二分にたくみ得たれば傷に人なれ打をうんて。

斧は迹く拒れよし。豫てはおん身もろ共に加々爲に足をとゞめ一期をもさんと
おひしるに鶏の觜と齟齬て。今又身口はかへらしぞ。往方を定めうしたる
をり。究竟のるは我ゆゑつ。今これはおん身を孫なるにして。彼白木屋にかたらひあり。
おん身を我ゆてこれは誘ひ。これは又利は我ゆて誘ひ渠かるならぞおん身を容れん。
おん身まづその家に入り。これ又後に彼処に入りて。内外より事は計らば。
主人ひとり我外せんとも。祀さんとも隨るなるべし。一旦權ひこれは著ば彼人は
嗣べれ子なし。目は閑息の絶るに及びて。金銀財宝いへばさらえ曲突の灰毛の
猫を救子を。おん身とり。これは取らば。生涯驕しのしむとも。なれ用ひあまりて
豈快愉とならぞや。その計畧は箇樣々々。如此こと耳は引よせ脣を
さし忌て。縡詳に說示せば。斧ゆゑてうち点頭。おん身の外他しまに添外
せんはこゝろにぞうけ引がこれ要なるまゝとまのゐにはおん身を賣て行事の御

原まで〻ろの客ゐる。天俄頃よ結陰夕立の雨さと降そゝぐ雷さへおど
ろく。芭蕉ぬりせん擔もるけはひ。ゐ刀かたや直と備るぞう。道次よさ
地蔵堂ある祇そゝく。蓑直よ走り入り。雲時晴る祇まつ程ふ爺の簔く
漏ほこそ蝉の羽よ似る羅衣の白かさ招そうをつゞ折て。長ゑ黒
髪祇結びさげ。左もよ蹴金の杖と衝。右もよ塗笠祇さ一翳しやん
でゐる兒姫御達の世ふ落魄し旅の姿よ。雨ふ遂るくおもちして走りそ
あくぜ地蔵堂の内へ入りんとうくよ祇を入てそ。秋波はして涙未ゑ乾
ひとり詹下よ立在る。年の齢ハ三十のうへ弦數超さん人やとうすぐ
いすぐ美るく髪ふあらそ。風よ乱るく柳髪。両よ悩る海山業の打
ぢりうの見ゑ諸平ふ膝のそもむ祇そぞ。横ようづめ綫ようづりくゐ
ゆくむ尾をこゑぞ。扨君うとめ鵜廼うり。痛やこゑそとの鵜へど

うをあるぞ。そ見てうへまほろこをおりうえよやおりぬ人乃妻と。
いうくともちん方よ寅縁ひとろ紅よ世祇うさぶをくとろ名まそ〻も遮ーかう
とるかくを討ひのくと意をとゑぶ丈ハ本日のう後のうのいよぐ祇へうの。うを
ぐ祇うのおちをうくよく論くそのこころ祇ふさをいまぐ各貴ゑ頭ざれ
こゑ祇伎倆の本祇すくゐ爺とおのぶ打扮ゞ祇衣裳ふどくそのびくよ赤坂の
驛よいるをくふまくる祇買求め。准伯既よとその人祖よ爺ゞ病著おこうく
うをど夫ハ事よ假托大関村よ逗留しくく日
生平よりをくよろうをゑ
毎よ堰稽のおとりく彩うりそこの日ハ四と祇天
おろうんあうべーかくはよ六月もすや十六日よろうとのろうをゑ
郎ゞ六七の忌日うをバ諸平ハ又墓ふまうせんあゐ朝そく宿所祇こち
ゐくく白木の報論寺へ治つく昇此二傾く北関の藤川と大関村の間なる小松

地藏堂は
笠やぐり
貪夫
淫婦は
賺さる

水子塚

丈八

地藏尊

奉納

諸平

南無延命地藏尊

いふものまゝ。國乱を城陥す其処とも志らせまゞひ出て志らぬ旅服を
志ゆふるゝらん。とゝれだや。とおそるく。後方より袂を引率人ゆへ。やんぬ
るゝ方ざゐの。ひとり何処へ申せゆへぞ。倶しまわらせ敷忠義の光堂
某甲なんどいふものハさもむらハまぐや。雷なんどをおどろくしく。を申さるゝ
大雨に。端ちく立在ゆふ。此こゝろの中推量をれば痛しくこそおもひ在れ。
おのれハてより程をとらぬ堺橋乃ゆとりなる。賈人にゆへば此こゝろおもひ
ぐうをあらぎ。いつまゞ立在ゆへぐれ。檐の玉水に裳濡れるゝ。おはじくれ
裡面へ入りて。憩せゆへかし。と慰めまうせば。引るゝ袖を拂ひあへぎ。なんく
とうて背ざゐへ。渚平が肩に倒れかゝれば。全軀忽地解ばがごく。辱さる
涙こぼれて。そがまゝに抱き留め。堂内へ冊さ入れて。下壇の鹿埃をれ
拂ひ。上座に居まゐらせて。なれ叮嚀に勦ゆまうせば斧ハいとゞ着し

げに。背向になりし袖垣の間よりとうんかうんて。憑しれ人の言れ素に名告るを
面るれ所為なぶらこゝらハまでちるれ比までを當國の守なりし時頼藝の
妹なり。兄頼藝武運微く。富田城没落しゆひて。おん往方定らなりぎ。
そのとれこゝらハまで乳母子なる。無地野忠八といふものに倶せられて。岐
岨の山家にての年来形なれ世紙るとせしが。其処にまたら住まびて。まゝが
まうせに任し。近江路を心あてに。舊里なりし敵地を犯しこゝまでハ
来つれどを暴雨に塗まどハされて。彼従者ハ何処ゆれん雷雨に魂
消るまゞ。ひとり立在心ぼそさよ。志らぬ行ぞと人のとひしとれ。雷と
共ゆんと誘ふし。むかしれ人ハ是情ゆゑなるれど。こゝらハまでおもふ郎をなし。
まうせぬ世とハいひなぶら。さらりの年紙るるまゞ。はましなれば旅衣
翌ハいづとに隠笠。さしてゆくへを途志らぎ。傳の海松布とよぶなれを。

良しとこんとや市人といひかけて同紙拭ひをあへず。あゝ苦しや。と胸前へ
嫋ゆかなる手紙推あてゝいと惱しげにあんえあへば。諸平は慌忙つゝ。おん後方に
立繞りて。背をゆさり搔拉まわらせ。世とて時とて痛しや。美濃の國司と
仰しあひし。頼藝朝臣の妹君と名告らせあへば。ゑ見覚僕ぞ。
賈人をいかぐ舊恩を忘るべし。此ぬつよく思召せ。おん身ひとゝはともかゝを。
べしとよいと慰こくおん袖の下より手首さし入れて。痞紙推下まわらせれば。
留奇南の薫えあらずを。いよく動く凡夫心ありがひもなれ妻をもら。
喪ひし身は餓たる猴の桃を抱くに異ならず。無分別なる劇剤ぞ。藪に
鄰里地藏堂。昨宵乃夢想灼然。握手に出現しあひて諸預成就とて折
丈八は簑の下に皂草の腹巻して。十王殿の臑當に。藤柄の大刀を踏。竹子
笠を額に翳て。南の方より走り來る。地藏堂をさし眼れて。姫君とて

在まかと声高ゆかに喚門が。諸平はこれに驚きさし身を隠すべし隈を
ゆかれば。ましく忙て忽地に下壇を撞と滾落。敷石に腰を打して足そら
さゝに弓にあり。裳を面へ引被て。霎時は起を得ざりけり。當下斧を
笑ひ紙忍びて。外面をうちうかゞめ。無地野黒八条ほとりといふに丈八遠
しく。笠投棄てまとみ入り。ひかけるに驟雨に。雨衣の准備も得せねば。
簑笠求め進らせんとて。些引さがりたる隙に。姫君乃おん往方をしらず。
驚れ瞬て彼此を索ぬるに程をよく。この処に坐するゆ。微臣が歎び
ことにあらず。雨を中霄ゆへばいざあへといそぎまうせば。斧は頭紙うち
掉て。さるいそぎそ迅雷に。いたく痞の發りしかば一歩をゐる不運びかに。
寔に人に人鬼なく。おろず宿りにそれなる市人いと叮嚀にこゝろを
勵す。夜抱大かたゝらざりに被物とらせよと仰するに力を得て。諸平は

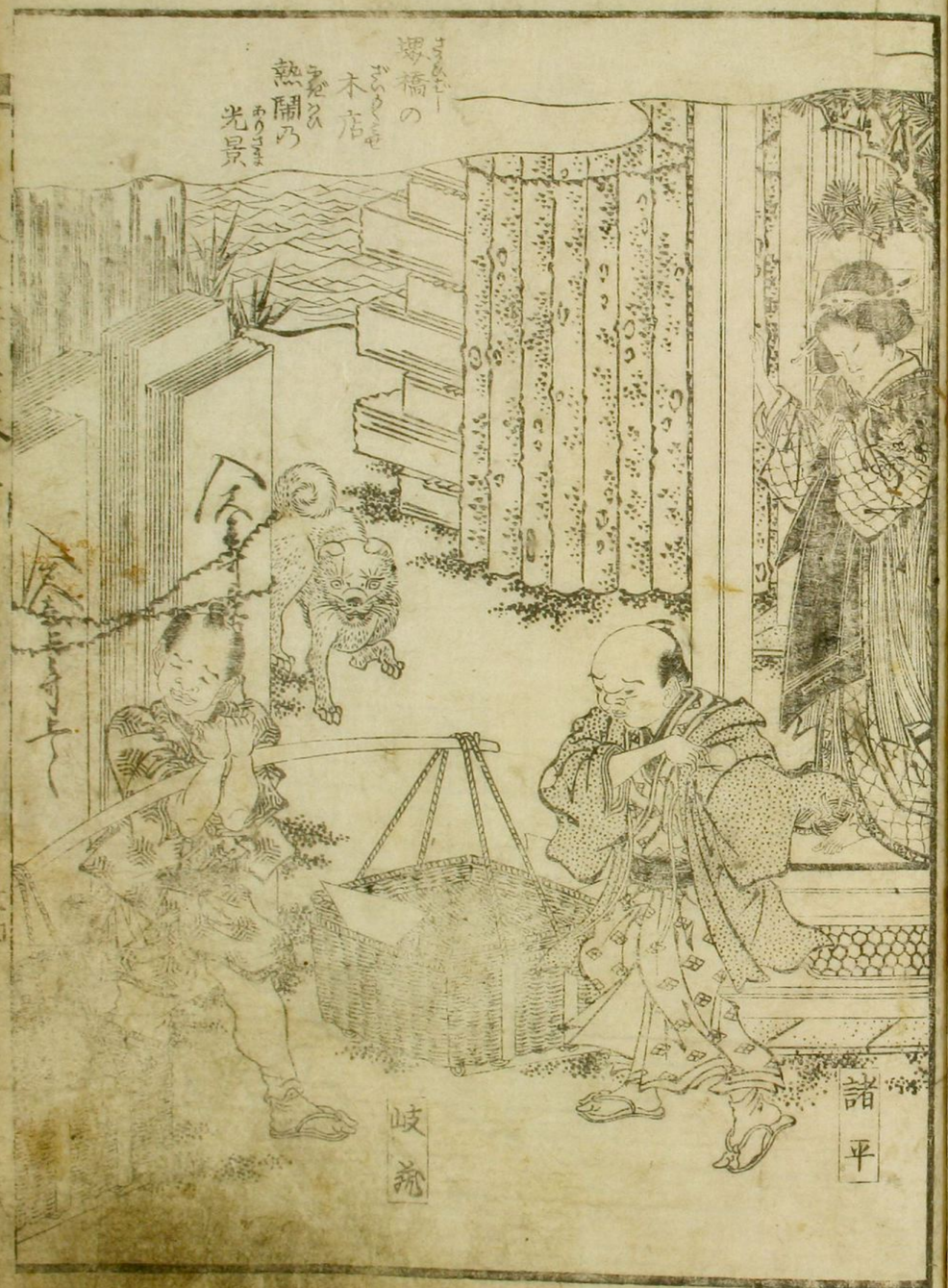
ゆうせ方を記せば丈八は信とうて。何処の何人とおもふ給ひを一樹の蔭も
他生の縁故ありて世に潜せるは姫君のおん病苦に看病まゐらせしを
神妙なるといへば諸平は額に著僕は堺橋に白木屋と呼ばれる。
人にゆへどを近ごろ俄に發跡して地方久しかものなら給ひ。おろしめさ
れぬことをあるべしおりとも前の囮司の妹君と名告らせるをいつで
情なくうんをるべし。おん供の方ざるへ遍まゐらせるが後ゆきしといふに
丈八うち忘れ姫君乃おんうへをたやおもふ給ふ。これが匿むよよるし。
おいふは姫の乳母子。数なら給ひとも。地野黒八年頃冊きなり岐阻の
山里に潜せなり。うれ年月を送るといへどを此運開るべうとあらず
近江なる観音寺の佐木家は舊縁をましませば廼姫君に勧めなり。
佐木家を憑んとてしたがくそのうへにまうしといへどを姫君を

諾ひなかず。舘のおんゆくへ定らなかず。世になれ人になりなれを告るものも
あるなるに。今更ひとり阿容にと観音寺へゆかん尼になりんを宮ふを。
ゆうせにとしらへて。こゝまでは倶しなりしが折ふるく中途の病著されどそ
この祭なれをして冷なりて。いよく重らせなひなんといふに斧は眉うち
顰めやうに黒八今又こりなく勧るとを近江へは赴れがたしとてをかくてる
埋木の身のなる果も仏縁落くて尼になること稱ばれ名に匿ひ迹を
埋め。賤のをのこに伴ることを恥ぶゆうしく佐木家へ身をよせんより
まことの我と呼れなへば丈八は。数回嘆息し。世が昔にてあらんにを。
名ある武将の北のこと冊をなへべれに。おん年さうり我ゆるなりまゝ定る
郎を在さ給ひ。いゆれもの妻になるとを世間ゆきて送らんを思ひこそ
痛しをかくまでに宮はしる我。とりなく彼処へ倶しまゐらせんや人ありて

姫君は且く舎荒をしらは某一人親音寺へ刻れて。佐々木殿へ危急を告
るべ。或は千金二千金。借受んと難さまあらず。その金を以て姫君の
婚縁を募んもの哉。とまでも又ゆゑ八が。身ひとつまてはいふに任せず世に
憑し人もなるとひとりごちつゝ利に誘引ば。諸平はいふにすみ出物数
ならぬ賈人が。却中さんは嗚呼なるべ。おん身が近江へ刻れて。金子調達をあふ
程は某身にかゝん命にかけて。姫を與ゆゑ在らん。とのこと許しあらん也。同じて
丈八大に頼び現潔き和殿の伝侠武士も及ばず天晴憑し。拘いふ事も假初
なりとぬ誠心気色に顕れたるまでば。ゆゑ事なり疑ひなど。如何とて近江へ
いかん姫の出ところいふにぞや。と問なるまでば莞爾とうち笑ひ憑すゝなれ
ことにとしつゝ。伴んといふ哉。いかでかは推辞べ。嘯諸平とせんそうしの
宿所は何処ぞや。子ども夥産しる。家刀自ありや。と念いまして。同ば諸平は既を

掻れ十年あまり病死する。女房のゆひしが一子さへにおほじ比月まかりてはや
日ごろ経たり。経営の為使る。小厮両三人ゆへども大凡女の子といふものは。牝猫
ごもゆゑぞ。と申よりまでば又莞爾とうち笑む顔を袖りて掩ひ。夫々ておちね
たりかゝるうぞ。こんなるうちあふると婀娜言葉は隠にの。初髪結にあらず。
結ぶ縁しは詐欺の黄金の罠にかゝの餌食。欲にはゆる雨後の道に草葉れ。
いと深れ伎倆にとは竟に暁らず。諸平はいよく信ぐこちて人の怪むとのやとて。
途にその日は暮しつゝ。関は名のこに戸鎖せぬ小川の宿所へ夜は一件の二人を
伴ひ入り。却説丈八は白木屋にその夜は あけて。甘く諸平は相譚課せ。金
子調達の為。佐々木家へ推集せとて。甲夜より文に旅ごちの用意してその
詰旦西は投て出しより。百日あまり久しき事ぞ。さまでは斧は情をもてど願
諸平は誘ふにぞ。外房の数もかさるまでに松尾山の千代までを離れはしと

かれは説かれ。かゝれは諸平は愁に隠れとせれど人もしれば亡妻図が送せし衣をそがまゝ小斧に被せて。賈人の女房に造かえまづ試に庖湢乃上に仕せけるに。節儉を宗として。かぐしく賈紙省れ正首ならざることなければ。ましてこれ紙愛飲び。只いつとなく妻と呼び。良人と脊眉せ土庫の鍵ならずとも斧が腰に著さして。金銭の出納まで大かたは任せ。牝鶏忽地晨しく斧が擅威主人に鳴る紙。小厮ホハ識アつゝを絶て。既紙擡沼ぎ丈八もこのとれまぐ。ふく近郷に躯れてをり。今はもやよれ比なりとて。いたく労れてるおもしろしく。白木屋へかゝり来にければ諸平はこれを頼るならず。閑室へ呼びへれて。斧とてもに園坐つさて佐々木家の消息を訪るに。丈八頻に既紙擡れ某観音寺の城へ乗アれて。姫君零落しあふまし紙。叮嚀に使えあげるを不愁訴の新紙。実に演んとしたかひなく。夫賀高源の諸老臣。却狐疑の心ふく。これ必鄰国の間諜者なるべしとて。矢庭に某紙生拘せ。獄舎に繋ぐこと九十餘日。鬱憤腸を断といへどを。愁訴の路竟に開けず。徒に死を俟んよりはと一夕風雨に紛れつゝ。辛く獄舎紙脱れ出。立かへりてゆ。と実しかに述しが。諸平は忽地ゆ紙失ひ呆るゝ半晌だり。斧をあゐるれおもしろしつ。近江のるゝは恨むことを及ばれ。されば今とて紙出て又何れへか赴くべれ。そうすこまれまぐ告給ども。主人が情に絆されて。既に此身をまはしたり。必叱まあふなといへば丈八嗟嘆しく。心あてにしたりなり。彼に木殿にまたり容られ給ばこれより外に憑む蔭なし。誠に夫婦の情縁は貴れ賤き差別なしいと似つはしくしえさせあふと壽詞を述しが。諸平はひとり[illegible]丈八を労ふのこと出しい給とをいひうこければ。己と紙沼ぎ店に居て[illegible]云ふ紙残るに。武士の果といふ拘うち。賈人のうへにさしく。[illegible]



堺橋の
木店
熱鬧の
光景
諸平
岐流

諸國書状

勘へ損益を辨ずる云云乎が乃ち正首二人（牛馬の
目玖を抜き佛の箔を剥ぐ渚平ふるまひを竟小暗ようぞ云々
愛く古狸ホよ耳く誘ふ云々大八ぺこぶ店の白骨彼ふてらといふ
ひ用ひく主管と稱つ店のる我仕せうぶ大八爺ふこてふ至りて隊ての計報全く
成就陽ふまいよく祇心と見しく陰ふまままもく殘毒と匿し物を掠め情と盗て
あるが家ふ死わふ密會と夜かさうまぶと人の生べたるうまぶ祇事ハ
こと玖ちくざうろう。かくてス二年あまりつこと招よ渚平ふ兵仁ぶあり。爺丈八ハ
拳動ところるぎ死とをあをべ。ごてふ此一ふ隣醒て彼ホがう祇よくふべ前の圏
守の妖君乳母子るみどいふものく落魄るのいあるべうとぶ。ごをべ世のふ周濶
虎落ところいふものよ。かすとくだ女ハ。ふと疑念並及ふてく。窮ふこてろ祇若ふた昵よ
爺ふ我ふてをてく。愛者ふ眼翳めべ。そをとうをとろふてをも為ふえそぶ。慢丈八ハ仕

ぞろ。うひ
身未佶業ふところ祇ふてる猛ふ巣を逐出さべ。損ありく益うえ要ふ疑へバ
鬼をうる。渠ホふ科ふうえめ祇ふこふみるものが迷ひうてんとうまる同ふとふ
甚てく。忽地をひくせぶと。ふとうよくふ曩ホ爺ふ要ふそ
より。つをとうぶてうろやぶてく。女児お駒をとう復さん。とをひうをを閑う雅ふ
人の親深ハ支婦ふままえのうえとぶ。十人ぺの子ハ生まる。仏放をてく。ふいふと
あり。況後の後の妻とや。老の坂ハ登る時う。年の波ハよまる連う家ふ
巨萬の我と稼とを。百年の後誰ふてうせんとてふつけてを術
よくお駒とう復を。煤ひべうとうく。
むとう曾とぞ並ひる。時ふ天文十七年。春二月。猶ホふ山の城中ふ齋藤右ふ大夫
義龍。一昌家隷郎堂と呂裏く。民を利し四我富まる策と問ふ。群派送ふ
優芥あり當下義龍ホ左右我佶とうえうく。いある天文十六年秋九月。先君道三

卒去の後ち家嫡となく其妻戒名兼嗣幸ひて武名堕さざりき
防禦の軍旅休暇へ豫てゐひ置ける遺言果さで又この春を迎ふ伴ゆ不破の律
の愚氏ぞ。五月五日よ子を生そだに忌てこと戒乗るゆめあり。不慈不仁の手
うてぞやよりてこと儒臣よ命じく和漢の例戒考索よ昔唐山よりさく
かるとあり。齊國の田文ハ五月五日よすてこと父田嬰こと戒忌て字ひを
うとといひをその母私よ養育せり。田文総角の比てぢめて父よ見ゆ五
月五日よする子をこぞそ不祥とこと
凡この日よする子よ対の長戸と育うると死ハ必親よ利ありこと戒諱とこの田文
ゆそ。人ハ命戒天よ受けぞ。命をふいうこぞや。と信ぢらくまうせじ父
せんよ孰ゆよく此よ至ゆ人嗚呼うるこぞ
ゆうやくこと戒暁ゆよくそゆめくその子の賢うる戒ありろ。さとぢそあれ

田文ハ當田世ゆ孚なる賢人ゆく。孟嘗君よ封ぢてゆを富芝と人臣のく人ゆ超ゆて
大よ家を起ゆうる。この餘王鳳王鎮悪胡廣ゐどの不賢人ゆる端午よまこぢ
戒ハ辛ゆく長ゆなゆる。戒ハ棄ゆる父母ゆ後悔ゆく。父よ親子の名当戒ゆゆ忌ゆすて
推ゆこれハ五月五日よする子を忌ゆく不祥とゆふべゆゆと却賢人負安ゆくゆる生死ハ
時戒擇ゆすゆ已よするの死ゆるの吉凶戒ゆゆもたいゆでゆよ生ゆぢぢゆ。
この旨戒今ゆゆゆ。向後端午よする子を棄ゆること戒禁ゆぢ。已ハ嫡子を棄て後
悔ゆゆゆ復今ゆゆのハ棄ゆる年の久ゆ少よ後ひ養育月のゆ貴ゆ紙養親よ
贖てその子を惜ハこと忌ゆぢ。かてゆゆうる弟法度を犯ゆく不慈の行ひゆるのゆ
そのてびハ救ゆ已ハ休達ゆくゆゆ。過ハこと忌ゆた病ゆとゆなく。下ゆすゆ
ゆく稲畑牧村の諸老臣感涙と拭ひあへど微妙玄和綻と兼すゐめゆる君公の
父母ゆゆく仁慈のハこゆうゆ女ゆハ武運長久ハ子孫繁昌疑ひなくゆゆと念

めろ元に祝しつゝ。日の要氏は果にまゐり。此の後に鄰國に使ひしかば。心あるも心なれも
常に拍て稱賛し。抑齋藤氏龍は父道三にいやましく心ざ及の悍れのこと智術に疎き
大将なれ元よりの家隷を畜ひ。かくのごとく仁政あり。嫚まがしとゝひしとぞされば
此一事をもて敵軍堺を抱きてとなく。その國且く安かりけるかりしかば白木屋茂平は
件の嚴命成侍うけあはりてあまりに事の欲しさに。いまだ馬が本末を斧ホに
告るに及ばず。俄頃に樽殺を購て八貫百丈の試と元に。元を一荷にて。小廝岐荒に
扛擔せ。羽織の紐を結びあへず。草履を横ざ及に穿へがゝ。頻に岐荒といそがし立
堺橋より東の河原へ元がごとくに走去るにぞ斧丈八ホハ。その有をしらず。これ何どの
いで陳と問いとまゝ。ごとくにへ入りしかば且驚れ且呆れ。ことばりに店れ框に
翹て。腮を擡。鼻の下に引伸。後に氣の霞むまぐ。忙然として目送り々事。

美濃舊衣八丈綺談卷之三終

通貫 近江仙